



カ レ ン ト

Current

R21



センマイチヂミウミアザミ *Sympodium omasum* Koido, Imahara & Fukami, 2024

端午の節句とカブトクラゲ

戸篠 祥

サンゴガニも、とってもかわいい

平林 勲

藻類を知ってほしい研究員の小話 (Vol. 6)

日野出 賢二郎

学名がひどい！「クロホシマンジュウダイ」の話

平坂 寛

たぶん美味しくないセンマイチヂミウミアザミ

古井戸 樹

公益財団法人 黒潮生物研究所

今年のゴールデンウィークはいかがでしたでしょうか。私は久々に帰省し、地元の海でクラゲ採集をしておりました。この時期、西日本の海ではカブトクラゲをよく見かけます。そういえば、端午の節句（こどもの日）には男の子の健やかな成長を願い、兜や鎧を飾る習慣がありますよね。ということで今回は端午の節句にちなみ、カブトクラゲについて紹介したいと思います。

【カブトクラゲとは？】

カブトクラゲは前回（R20）でも紹介したツノクラゲと同じ有櫛動物（クシクラゲ）の仲間です（図1）。有櫛動物は刺胞動物のクラゲのように毒針をもっておらず、触っても刺されることはありません。体はゼラチン質で非常に軟らかく、ほとんど（95%以上）が水分です。そのため、少し触れた程度でも体の形が崩れてしまいます。クシクラゲを採集する際には、ひしゃくやバケツを使って体を傷つけないように優しく採集します。

カブトクラゲの体長は5 cmほどで、成長すると最大10 cmに達します。ややずんぐりした体型で、袖状突起を広げた姿が兜のように見えることからカブトクラゲの名があります。学名は *Bolinopsis mikado* ですが、*Bolinopsis* はラテン語で「ニンフのような外観」を意味します。水中を漂うカブトクラゲの姿がニンフ（精霊）の

ように神秘的だったため、このような学名を着想したのかもしれませんが、mikado は「帝」を意味しますが、こちらは帝（天皇）が着用する冕冠（べんかん）に由来するのかもしれませんが。ちなみにカブトクラゲは1907年に Moser により、相模湾で採集された個体を基に記載されました。Moser が日本に由来する学名をつけてくれたのは何ともうれしい限りですね。

【カブトクラゲの生態】

カブトクラゲはカイアシ類やゾエア幼生などの小さな甲殻類を捕食することが知られています。飼育下でもアルテミアのノープリウス幼生を与えると良く食べます。カブトクラゲの天敵は同じクシクラゲのウリクラゲです。ウリクラゲはカブトクラゲが大好物で、丸のみにするようにして捕食します。その他、アカクラゲやオキクラゲなどクラゲ食のクラゲからも食べられてしまいます。

カブトクラゲの分布域は広く、本州や九州、四国沿岸を中心に一年を通して出現します。穏やかな湾や入り江にある港に現れることも多く、クシクラゲの中では最も出会いやすい種といっても良いかもしれません。

通常は海に生息するカブトクラゲですが、塩分適応の幅が広いので淡水が混じるような少し塩分の低い海域にも生息することができます。そ

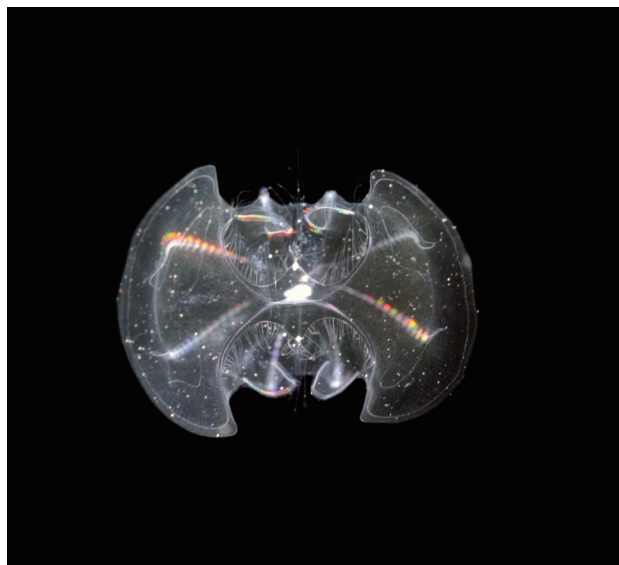
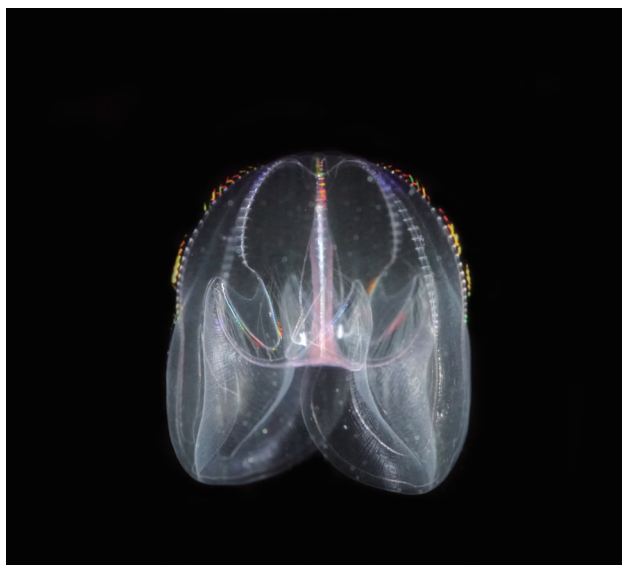


図1. カブトクラゲ *Bolinopsis mikado*. 左：側面 右：反口面。

のため、河川が流入する湾の奥でもカブトクラゲを見かけることがあります。

カブトクラゲは時に大量発生することもあり、港全体がカブトクラゲの群れに埋め尽くされるようなことも。こんなときにプランクトンネットを曳くとカブトクラゲで網が目詰まりしてしまい調査になりません。この程度の被害であれば問題になりませんが、シラス（カタクチイワチの稚魚）漁の網に混入し漁獲物の鮮度や品質を低下させたり、崩壊したカブトクラゲの粘着物質が養殖魚をへい死させたりするなどの漁業被害が起こっています。

そんな海の厄介者としての一面もあるカブトクラゲですが、水族館で展示されることもある人気のクシクラゲです。最近では加茂水族館がカブトクラゲの安定した繁殖方法を確立し、カブトクラゲを餌とするウリクラゲも安定的に展示できるようになりました。櫛板を波打たせながら水中を漂うクシクラゲたちは夜のネオン街のようで何とも幻想的。見かけた際にはぜひ足を止めて観賞してみてください。

カブトクラゲの幼生はフウセンクラゲ型幼生と呼ばれ、楕円形の体に2本の羽状触手をもっています。触手には膠胞（こうほう）と呼ばれる粘着細胞があり、餌となる小型甲殻類をくっつけるようにして捕獲します。触手は成長と共に口周辺に移動し、体長が15 mmほどになると完全に退化してしまいます。



図2. カブトクラゲのフウセンクラゲ型幼生。

【カブトクラゲの仲間たち】

カブトクラゲの仲間（カブトクラゲ属）は世界で10種、日本では3種が知られています（図3）。北海道や東北に出現するキタカブトクラゲは袖状突起の子午管（しごかん）が屈曲するのが特徴です。子午管に沿って黒色斑をもつことも多いです。西日本に生息するアカホシカブトクラゲは体に朱点があるのが特徴です。カブトクラゲと比べると稀であり、カブトクラゲの群れに混ざっていることも。見つけたらうれしくなるクシクラゲの一つです。また、深海に生息するアカカブトクラゲ（アカカブトクラゲ属）は全身赤色の大変美しいクシクラゲです。棲んでいるのが深海なので、なかなかお目にかかれないですが、いつかは観てみたいものです。



図3. カブトクラゲの仲間たち。左：キタカブトクラゲ *Bolinopsis infundibulum* 右：アカホシカブトクラゲ *Bolinopsis rubripunctata*。

皆さんはサンゴやその骨格が作り出す構造に驚くほど多様な生き物たちが暮らしているということをご存知でしょうか？

今回はそんな生き物たちから、サンゴの心強いパートナーであるサンゴガニについてご紹介します。

サンゴガニ属 *Trapezia* は全 22 種からなり、国内からは 14 種が報告されています。本属のカニ類はおもにハナヤサイサンゴ科のイシサンゴ類を宿主（棲家）として利用し、成熟した個体の多くは雌雄のペアで暮らしています。またこれらのカニ類はサンゴの粘液や組織、サンゴ上に降り積もった堆積物などを餌としており、サンゴの枝の間を隠れ家や生活・繁殖の場として利用しています。

一方、サンゴにとってもカニがいるメリットは大きく、セレンサンゴガニという種類では、濁った条件下でサンゴ上に降り積もった堆積物を除去し、サンゴの健康状態を維持することが知られているほか、いくつかの種ではオニヒトデやマンジュウヒトデなどのサンゴ食生物からサンゴを防御する行動が報告されています。

このようにサンゴと支え合いながら暮らしているサンゴガニ類ですが、今回はそのなかから最もポピュラーな種である（標準和名）サンゴガニ *Trapezia cymodoce* について取り上げたいと思います。

サンゴガニは国内では千葉県館山以南に広く分布しており、四国周辺では最も普通に観察できるサンゴ共生生物の 1 種といえます。この「サンゴガニ」という和名については前回ご紹介したキモガニ同様、甲殻類研究の世界的な大家である酒井恒先生によって「珊瑚礁に最も普通な蟹で、ミドリイシ等の枝間に生息す。」という脚注を添えて提唱されました。

本種は同属のカバイロサンゴガニ *T. bidentata* やカストロサンゴガニ *T. lutea* と混同されやすく、



図 1. サンゴガニ *Trapezia cymodoce*（上）とカバイロサンゴガニ *T. bidentata*（下）の標本画像。カバイロサンゴガニには鉗脚外面の綿毛や甲面の赤色小斑がない。

古い図鑑などではしばしばサンゴガニとして別種の画像が掲載されていることが見受けられますが、①甲が赤褐色から青紫色を呈し、甲面の両側には中央にかけて濃赤色の小斑が並ぶこと、②鉗脚（ハサミ脚）は掌節から腕節にかけて外面に綿毛を有し、指部は先端から 2/3 ほどが淡黄色から濃い褐色を呈すること、③歩脚は前節末端に白い帯模様を有し、赤色小斑を欠くことなどから見た目からも同属の他種と容易に区別することが可能です（図 1）。

サンゴガニは四国や九州、紀伊半島などではハナヤサイサンゴやショウガサンゴといったハナヤサイサンゴ科のほかにもミドリイシ属のミドリイシ *Acropora solitaryensis* というサンゴを宿主として利用することが知られており、いずれのサン



図 2. ミドリイシのうえで暮らすサンゴガニのペア、鉗脚をこちらに向けて威嚇している。

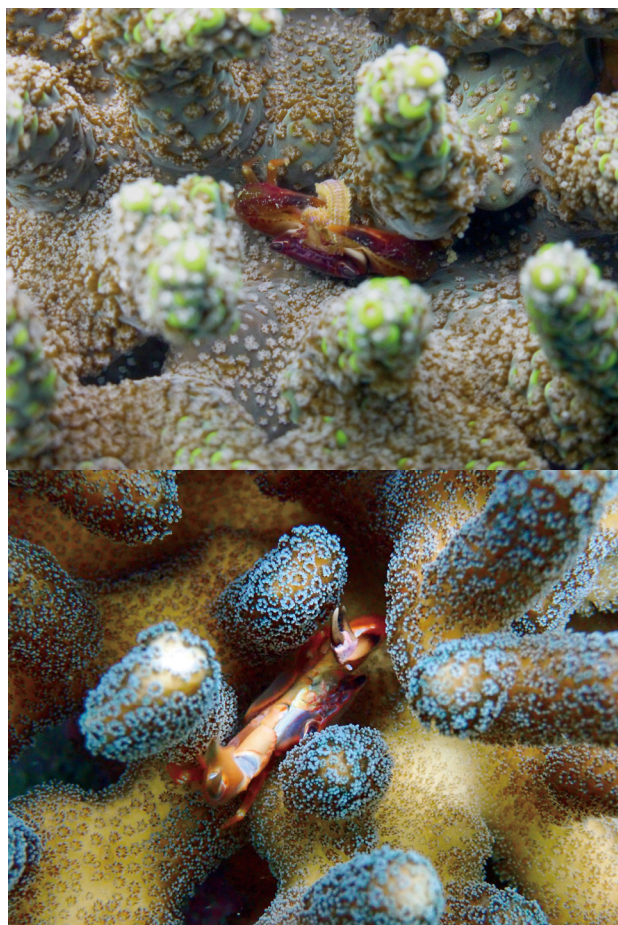


図 3. ゴカイの仲間を捕食するサンゴガニ（上）と他のカニのはさみを食べているサンゴガニ（下）。

ゴ上でもかなりの確率で観察することができます（図 2）。とりわけ、ミドリイシの上では体サイズの大きな立派なペアが見つかることが多く、人間に対して「ここは自分達の縄張りだ！」といわんばかりに大きな鉗脚を振り上げて威嚇してく

ることがあります（図 2）。その様子は見ていてなんとも可愛らしいのですが、本種のそうした攻撃的な一面はサンゴの天敵であるオニヒトデに対して非常に有効です。前述したとおり、サンゴガニ属の多くの種ではオニヒトデに対する攻撃行動が知られていますが、なかでも比較的体サイズの大きな本種の攻撃は強力で時に巨大なオニヒトデの棘をへし折ってしまうこともあります。実際、オニヒトデのサンゴ選択にサンゴの共生生物がどのような影響を与えるかを調査したオーストラリアの研究では、サンゴガニ属のなかでもとくに本種が共生するハナヤサイサンゴ科のイシサンゴ類はオニヒトデが避けやすいといった結果が報告されています。

また、近年ではサンゴガニ（とクロサンゴガニ）に関してサンゴ由来の餌だけでなく、夜間にプランクトンを積極的に摂餌していたという報告もなされています。じつは私もこれまで何度か本種が他生物を捕食している場面に遭遇したことがあったのですが（図 3）、昼間であったせいか、そのような個人観察はかなり稀で、偶発的なものだと思い込んでいました。本種に限ったことではありませんが、本当は色々なサンゴガニ類がその時々で利用可能な資源を幅広く利用しているのかもしれません。

サンゴガニたちの行動や生態に関して今後も注意深く観察していきたいと思います。

小話 (Vol. 5: Current R19) では「渦鞭毛藻」についてお話しさせていただきました。今回は、沿岸域で珪藻、渦鞭毛藻に次いでよく見かける植物プランクトン「ラフィド藻」と「ディクチオカ藻」について話をしていきます。

読者：いやあー。待っていたぞお。早くその、ラフィド藻とディクチオカ藻について聞かせてくれな

いか！
著者：まあまあ、落ち着いてください。まずは続きを読んでみてください。

ラフィド藻 (Raphidophyte) とは、細胞前端あるいは側端から2本の不等長の鞭毛を有する単細胞の藻類です (図1)。外形は、紡錘形や卵形などをしています。細胞壁や鱗片を持たない無殻の藻類であり、体形は変化しやすい特徴があります。光合成色素として、クロロフィル *a*・*c* およびフコキサンチンを有するため、黄褐色をしています。

Chattonella marina シャットネラ マリーナ、*Heterosigma akashiwo* ヘテロシグマ アカシオ、*Fibrocapsa japonica* フィブロカプサ ジャポニカなどは有害有毒赤潮 (HAB) の原因にもなります。

本邦では、有明海・八代海を中心に西日本で養殖魚に対する漁業被害が多く報告され、数億円規模の漁業被害もたびたび出ています。

ディクチオカ藻 (Dictyophyte) とは、1本の鞭毛と珪酸質 (ガラス質) の骨格を有する藻類です (図2)。生活史の中で骨格を持つ時期と持たない時期があり、形態は大きく変化します。

骨格の形状は種によって異なりますが、ひし形や正多角形 (主に八角形) をしています。また、骨格を持たない時期はほぼ球形をしています (図2右)。

ディクチオカ藻もまた赤潮を形成することが知られています。*Octacts octonaria* オクタクティス オクトナリアによる赤潮では、養殖魚を斃死させ、1億円を超える漁業被害が出たこともあります。

読者：ほおほお。どちらも初めてきく藻類だねえ。前に教えてもらった珪藻や渦鞭毛藻以外にもまだ赤潮を起こす藻類がいるんだねえ。

著者：そうですね。普段、シャットネラやディクチオカの名前を耳にすることはほとんどないかもしれません。

ですが、シャットネラによる赤潮は、渦鞭毛藻 *Karenia mikimotoi* カレニア ミキモトイや *Margalefidinium polykrikoides* マーガレフィディニウム ポリクリコイデスに並び、養殖魚に対する漁業被害が出ている藻類です。

読者：なるほどねえ。どんな生き物なのかもう少し知りたくなったよ。もっと教えてくれないかあ。

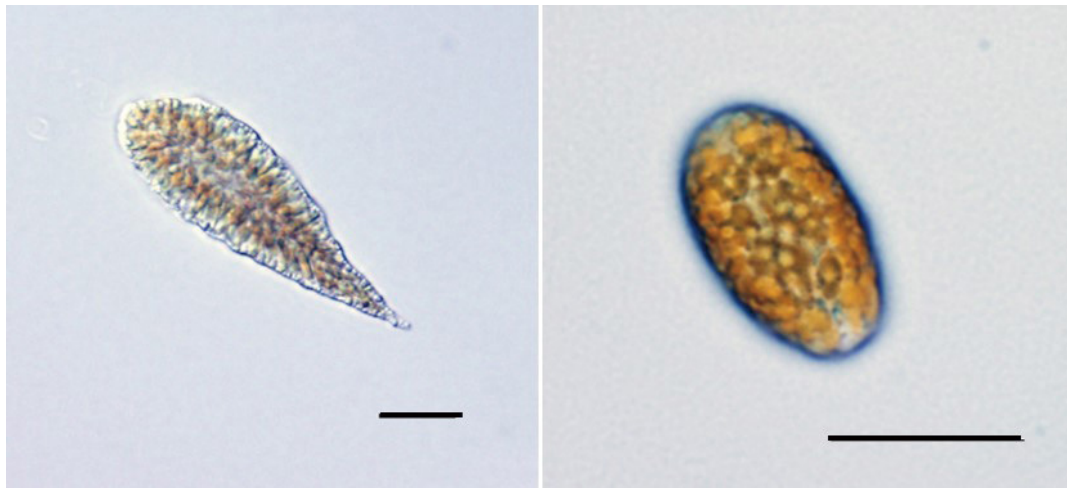


図1. *C. marina* var. *antiqua* (左), *F. japonica* (右), Scale bar = 20 μ m.

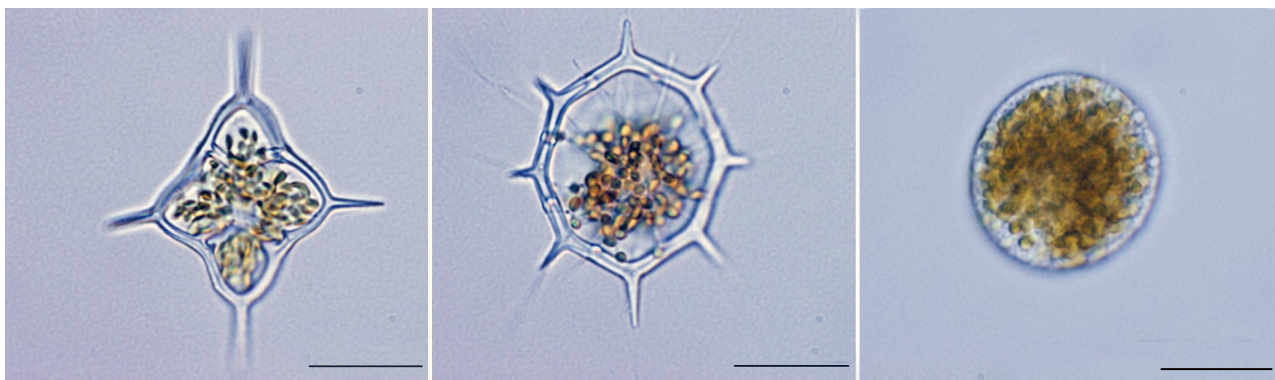


図 2. *D. fibula* (左), *O. octonaia* (中), 骨格を持たない *D. fibula* (右), Scale bar = 20 μ m.

著者：そうですね。せっかくですので、シャットネラとディクチオカにまつわるお話をしましょう。

シャットネラは、無殻であるため、細胞外形が変わりやすい生き物です。そのため、遺伝子による系統解析が行われる以前は、細胞外形の違いによっていくつかの種に分かれていました(現在、シャットネラ属は 4 種 2 変種)。

ディクチオカもまた、遺伝子による系統解析が行われる以前に、骨格を持つ時期と持たない時期で形態が異なるため、ディクチオカではない別の藻類であると思われていました。

読者：おやおや？君、もしかして？

著者：おや、勘がいいですね。

実は、骨格を持たない時期のディクチオカは球形をしたシャットネラだと思われていたのです。

私が学部生の頃は、骨格を持たないディクチオカはまだ *C. globosa* シャットネラ グロボーサと呼ばれていました。

当時、種同定に用いていた図鑑には、そのように記載されていたため仕方ありません。

読者：シャットネラとディクチオカにそんな過去があったなんてね！藻類は見かけによらないねえ。

著者：うわ、うまいですね！実は、私が学部生だった頃に、*D. fibula* と *C. globosa* が珍しく混在して優占している！と思って写真を撮ったことがありました(図 3)。後になって、骨格も持つディクチオカと持たないディクチオカがいただけだと知りました。

その後もディクチオカに興味を持ち、骨格を作らせたり、脱がせたりできないか培養実験をしたこともありましたが、うまくいきませんでした。

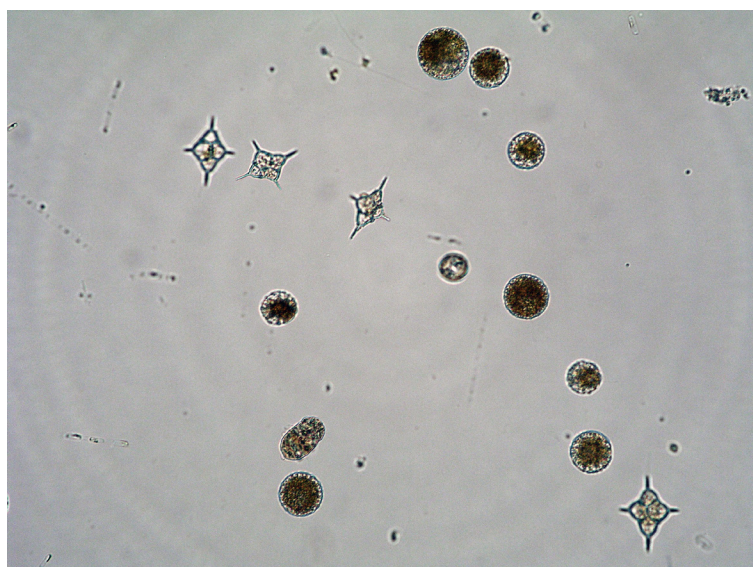


図 3. 混在する骨格を持つ時期と持たない時期の *D. fibula*.

読者：自然界で起こっていることを培養下で再現するのは難しいんだねえ。ラフィド藻とディクチオカ藻かあ、なかなか興味深い藻類だったねえ。

著者：今回も小話をお聞きいただきありがとうございました。

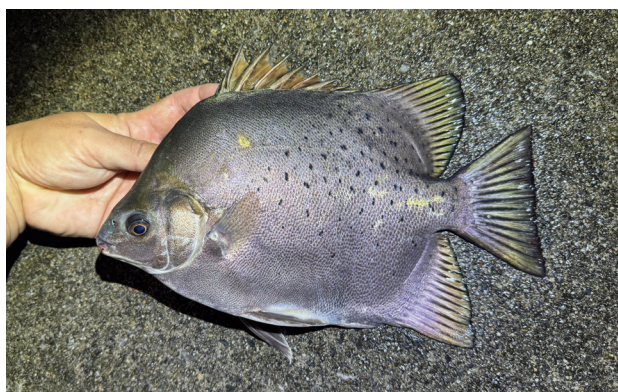
もし、読者のみなさまの中に、ディクチオカの骨格を作らせたり脱がせたりしたことあるよ！って方がいらっしゃいましたらご一報いただき、培養の方法を教えてくださいたいと思います。

今年も夏が来る。水温が高くなる。この季節になると、本土の沿岸や河川で見慣れない謎の魚の目撃例が増えてくる。

体型はコインのように円く薄く小さく、黒い斑点到に橙色の差し色が入るという特徴的な姿の魚だ。特に小さな個体では頭部にゴツゴツと突起した骨格が見られ、なお異様である。この可愛らしくも妙な小魚の名は「クロホシマンジュウダイ」。最大で全長 30 cm 以上になる魚であり、頭部に突起があるのはトリクチス幼生と呼ばれるほんの一時期のみ。また橙色の斑も成長とともに薄れ消えていく。

特に稚魚～幼魚期は華やかで愛らしいため観賞魚として流通することもある。その際はたいてい「スキャットファーガス」なるなんとなくカッコ良さげな響きの呼称で取り扱われることが多い。この名の意味が重大なのだが…… それについてはのちほど触れよう。なんにせよ、ややマイナーながらも一部の人々には愛されている魚なのだ。

ところが、である。やがて秋が来て冬が来て水温が落ちてくると、いつのまにかその奇妙でキュートな魚は消えてしまっている。一体どこへ行ってしまうのか？…… 残念ながら、皆絶命してしまうのだ。クロホシマンジュウダイは南方系の魚種で、国内では主に琉球列島以南に生息する。つまり本土で見られる本種の多くは、いわゆる「死滅回遊魚（季節来遊魚）」なのである。



クロホシマンジュウダイの成魚。沖縄本島にて。



本土では、ハリセンボンも多くの場合が死滅回遊魚。



秋頃に東京湾で見つかるロウニンアジも死滅回遊魚の典型例（だが、近年は温排水などで比較的大きなものが見つかることも）。

死滅回遊とは主に熱帯、亜熱帯性の水性生物が暖流に乗って北上するものの、秋冬が訪れると低水温に耐えられず死滅する現象だ。

だが近年、本来なら「死滅」していたはずの海域で比較的大型の個体が採集される例が散見されるようになってきた。黒潮生物研究所のある高知県では年間を通じて成魚が見られるようになっていると聞かし、今春には大分県別府市内を流れる河川で 20cm ほどの個体が採集され話題となった。現在進行形の、海水温上昇による分布拡大のわかりやすい例と言えよう。

死滅回遊、無効分散と聞くといかにも無駄死にという印象を抱いてしまいがちだが、こうして



マングロープもクロホシマンジュウダイがよく見られる環境。



中華圏では、クロホシマンジュウダイやその近縁種も積極的に漁獲され、市場に出る（香港にて撮影）。

海水温の微妙な変化に応じて分布を拡大しつつある現実を示されると、種としては「意義ある死」なのだなと思ひ知る。現代は死滅回遊魚を多く生み出す海流分散の効果が強く可視化される、ある意味で貴重なタイミングにあるとも言えそうだ。

さて、時にそんな危険な旅を強いられてしまうクロホシマンジュウダイだが、温暖な沖縄では成魚幼魚ともに安定して見ることができる。特に丸々と太った成魚を見かけると「お前はラッキーだったなあ」とほっこりしてしまうものだ。だが、沖縄において知名度が高い魚かというとなんともない。市場に並ぶこともほとんどなければ、遊漁対象として釣り人に狙われることも滅多にない。

理由のひとつには生息環境が挙げられるだろう。沖縄における沿岸漁業はリーフでの潜水漁と船からの一本釣りなどが主である。だが、クロホシマンジュウダイが好む環境は河川汽水域や漁港内といった、いまひとつ漁場となりにくい水域なのだ。

さらに、食性も釣り人の針から逃れる要因だろう。本種は雑食性で時には動物質のものも食うのだが、デトリタスを特に好んで摂食する。デトリタスとは水底に沈澱した有機物で、泥状であることが多い。これを小さな口でついでむように食べるのだが、人間の目から見るとどうにも美味そうに見えない。



肉付きがよく歩留まりが良い

そんなある種の悪食さゆえか、ついた学名が "*Scatho pagus*". 糞便を食う者、という意味だ。

..... こんなに忌々しい名はそうそうない。先述した観賞魚として流通する際のスカットファーガスという呼び名もこの学名からきている。

..... もちろん実際に動物の糞ばかりを専食するというわけではない。デトリタスと並んで藻類もよく食う。それゆえ、沖縄で盛んなゴマアイゴ釣り（藻類をエサとする）で外道としてたまに釣り上げられる。また、より稀なことだが練り餌やオキアミを用いたミナミクロダイ釣りでも釣獲される例を伝え聞く。

狙い撃ちで釣るのは簡単でないため、専門に追いかける釣り人はいない。だが、うっかり釣れた場合はなかなか喜ばれる存在でもあるという。なぜなら美味で知られるゴマアイゴに負けず

劣らず味が良いからだ。人によっては本種の方が美味しいという意見も聞く。糞便食いという名からは想像しがたい高評価である。

これは試してみなければとつい先日、僕も網で掬った立派な個体を刺身と潮汁にして試食してみた。結論からいうと、やはりかなりの美味であった。捌くと消化管からは大量の藻類と泥状のモノが流れ出し、強烈な磯臭さが台所を包んだ。が、なかなかどうして。身は脂の乗った白身でやはり冬場のゴマアイゴやインダイに通じる味わいである。臭みはほとんど感じられない。

また、魚のもつ臭気をもっとも如実に反映される潮汁もクセがなく、良い出汁がしっかりと出ていた。顔が小さい割に体高も厚みもある魚体からはたっぷりと肉が取れたが、あっという間に一人で平らげてしまった。こんなに美味いなら、今後は見つけたらできる限り捕らえて持ち帰ろうと心に決めた次第である。皆様にも機会があれば一度試してみてください(もし臭かったり不味かったりしても責任は取れませんが……)。



クロホシマンジュウダイの刺身。



クロホシマンジュウダイの潮汁。



背鰭の棘。



患部は腫れ、ズキズキと痛む。痛みの程度と持続性はゴンズイに近い。

ただし、本種を扱う上で注意すべき点がひとつある。背鰭、腹鰭、臀鰭に鋭く太い棘をもち、どうやらそれらが毒針であるとされているのだ。

捕らえた際にものは試しと左腕に背鰭棘を突き立ててみたが、ゴンズイに刺された際に似た鋭くもしつこい痛みに見舞われた。程なくして患部が赤紫色に腫れ、異様な痛みが続いたことから、彼らが何らかの毒を備えているのは間違いないであろうと考えられた。

本種は体長に対して筋肉量が多く、かなり力が強い。釣り針をはずす際などに手の中で暴れられたりすると、深々と毒針が皮膚へ刺さることも考えられる。そうなっては三枚におろすのもままならないであろうから、十分に気をつけるべし。なにせよ、クロホシマンジュウダイは可愛く、強く、美味しい、その学名にそぐわぬ素敵な魚だということだ。

チヂミウミアザミ属 *Sympodium* Ehrenberg, 1834 は ウミアザミ科 Xeniidae Ehrenberg, 1828 に属する八放サンゴで、岩などを被覆し、そこから小さなポリプを伸ばします。多くのウミアザミ科と同様に、骨片は扁平な楕円形のものを持ちますが、今回ユニークな骨片をもつチヂミウミアザミ属の一種を新種として記載しましたので紹介させていただきます。

今回記載したチヂミウミアザミ属の一種（図 1）は宮崎県日南市周辺海域で採集したものです。一般的にチヂミウミアザミ属は扁平な楕円形の骨片のみを持ちますが、今回記載したものは二連頭状と扁平な楕円形の 2 種類の形状の骨片を体内に持ち（図 2A, B）、扁平な楕円形の骨片はこれまで確認されたことのない結晶構造をしており、その表面はひだ状で、円錐状の突起を沢山持っていました（図 2C）。サンプルを採集した宮崎県が宮崎牛の産地であることに加え、骨片の表面構造がセンマイ（図 3; 牛の第 3 胃で、表面が多数の突起に覆われたひだ状となっている）に似ていることから *Sympodium omasum*（牛などの反芻動物の第 3 胃のことを英語で Omasum と言います）、センマイチヂミウミアザミと名付けました。

とはいえ、八放サンゴはたぶん美味しくないで食べるのはおすすめしません。宮崎県沿岸や、高知県沿岸は八放サンゴの大群落がいたところに存在し、名前の付いていない種も存在します。引き続き日本周辺にどのような八放サンゴが生息しているか調べつつ、未記載種に名前を付けていきたいと思います。

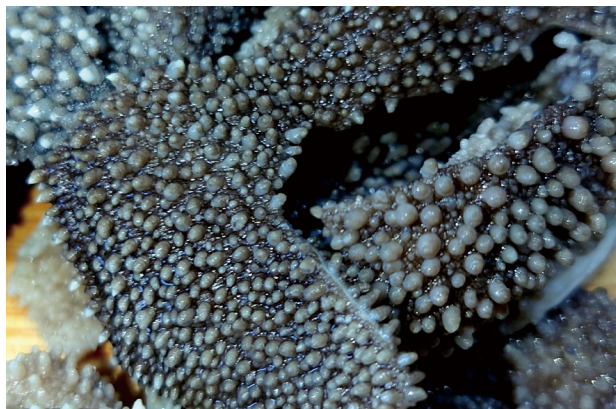


図 3. センマイ。この後、筆者が美味しくいただきました。



図 1. センマイチヂミウミアザミの群体。

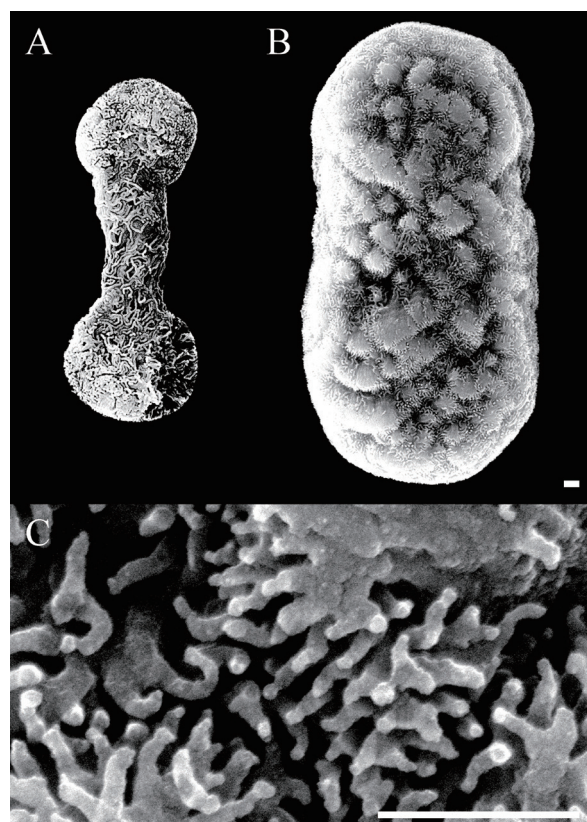


図 2. センマイチヂミウミアザミの骨片。A. 二連頭状 B. 扁平な楕円形 C. 扁平な楕円形の表面。スケールバー：1 μ m。

最後にこの論文を執筆するにあたり、共著者の今原幸光氏、深見裕伸氏にはたくさんのアドバイスを頂きました。また、記載にあたりチヂミウミアザミ属の情報を頂いた Alderslade 氏と Reinicke 氏にもこの場を借りて感謝申し上げます。

— 論文情報 —

掲載誌：Zootaxa（2024 年 4 月 22 日公開）
 タ イ ト ル：A new species of *Sympodium* (Octocorallia, Xeniidae) from Miyazaki, Japan
 著者：Tatsuki Koido, Yukimitsu Imahara, Hironobu Fukami

研究所からのお知らせ

研究所の新年度がスタートしました！

昨年度をもって、喜多村鷹也研究員と吉岡武瑠研究員補、今原幸光客員研究員が退職しました。今年度は8名（研究員6名、事務員2名）で活動していきます。

今後も黒潮流域に生息する生物の研究をはじめ、普及啓発・環境保全活動などを行っていきます。みなさま、今後も応援のほどよろしくお願い致します！



吉岡 元研究員補の送別会。

徳島県海陽町で磯観察イベントを行いました！

2024年5月11日に徳島県海陽町竹ヶ島にある海洋自然博物館マリングラム周辺の磯で、「いその生物観察会」を行いました。当研究所からは目崎所長、戸篠主任研究員、伊勢研究員が参加しました。一般から21名の参加があり、磯で見つけた生き物を研究員と一緒に調べ、スケッチや写真撮影を行いながら、みんなで図鑑作りを行いました。子供も保護者も一緒になって、たくさんの磯の生き物に触れることができました。



磯観察会の様子。

古井戸研究員 新種を発表！

当研究所の古井戸樹研究員、八放サンゴ研究室の今原幸光氏、宮崎大学農学部海洋生物環境学科の深見裕伸教授の研究グループが宮崎県日南市の日南大島周辺に生息するソフトコーラルを採集し、分子系統学および形態分類学的な調査を行った結果、チヂミウミアザミ属の新種であることが判明しました。

詳しくは、本文をお読みいただきたいと思います。



センマイチヂミウミアザミを片手に微笑む古井戸研究員。

Current（カレント）季刊 2024年5月27日発行

編集・発行 公益財団法人 黒潮生物研究所

〒788-0333 高知県幡多郡大月町大字西泊 560 番イ

TEL 0880-62-7077; FAX: 0880-62-7078; URL: <http://www.kuroshio.or.jp>

E-mail: mail@kuroshio.or.jp（機関誌購読を希望される方はご連絡下さい）

3000円以上のご寄附でその年度の Current 4号分を送付いたします。寄附は当研究所のホームページまたは寄附申込書から受け付けております。

※本誌の一部または全部を複製する際には当研究所宛てに許諾を求めてください。